

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

公平さと厳しさ 真の教員と出会った

慶応高校（塾高）からは多くの人材が各界に輩出しているが、中でも1966年卒の17期は多彩な顔ぶれがそろった。

病理医の向井万起男（68）は2年の時、脳脊髄膜炎で緊急入院して2日間意識を失った。退院



現役の病理医を引退、「大リーグざんまいの日々」という向井

慶応高校 1

後も風邪をひいただけで再発を心配する毎日だったが、「今思えば疾病恐怖という神経症。生死をさまよう経験をし、医者になってから患者さんへの思いやりを持てるようになった」。

病気で期末試験を受けられなかった時、英語教師が後日、追試とは別の問題で試験をしてくれた。「公平さと厳しさを持つ教員のかげみ。自分が教える立場になってからも時々、思い出します」。妻は日本人女性初の宇宙飛行士、向井千秋（63）だ。17期には日本オリンピック委

員会（JOC）会長の竹田恒和（67）もいる。高校時代は馬術部。2年の時に東京五輪があり、学校を休んで軽井沢まで馬術競技を見に行った。「世界のレベルに感動した」。馬は騎手を信頼しないと障害物を飛べない。不安な気持ちへの思いやり



「高校時代は馬術の練習に明け暮れた」と話す竹田

が大切だ。「人間の信頼関係、コミュニケーションと全く一緒。馬術部で学んだことは、今の仕事にも生きています」

向井、竹田と普通部（中学）

から同級なのが、元駐米大使の藤崎一郎（68）。高校時代、トルストイの『戦争と平和』やスタンダールの『赤と黒』など多くの本を読んだことが「人生を豊かにし、外交官時代にも役立つ」と振り返る。「高校は人生



藤崎が教える上智大の研究室には歴代大統領との記念写真も

の土台づくりの時期。一生の友達をつくれるよう、毎年あるクラス替えも見直しては。語学教育の充実など一貫教育の利点も、もっと活用すべきだ」

東京駅100周年のエキナカ開発に尽力した「鉄道会館」相談役の野崎哲夫（67）は数学好きだった。教科書会社に「この記述はおかしい」と質問状を出したことも。数学を究めようと東大に進んだが「上には上がいる」と悟り、当時の国鉄に。鉄道、街づくり、エキナカを手がけた経験を生かし、「街としての東京駅」を作り上げた。

野崎と親交のある食品会社「味の浜藤」会長の森口一（68）は「塾高では人のつながりの大

切さを知った。それは会社の経営にもつながっている」。現在、東京・渋谷駅そばの「東横のれん会」会長も務める。

慶応高校は慶応義塾の一貫教育校として1948年に設立された男子校。慶応義塾高校が正式名称で、通称は「塾高」。当初は第1・第2高校に分かれていたが、49年に統合されて東京・三田から現在の横浜・日吉に移転。大学予科として使われていた校舎は、戦後しばらく米軍に接収されていた。卒業生に関する情報はkanagawa@asahi.comの「青春スクロール慶応係」へ。